
考の道

封門妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

考の道

【著者名】

NZマーク

N6907C

【作者名】

封門妖

【あらすじ】

私の前にいる彼。彼と私の考えはどのよのうなものなのか。

田の前には形の整つたきれいな顔が一つ。たつたそれだけ、そのたつた一人が目の前にいるだけのこの部屋にいる私。でもどうしてなのか、心が重苦しい。呼吸がしづらくなるほど胸が締め付けられている。

不意に私の目の前の顔が動いた。私は唇に何かが触れる感触があった。柔らかい。彼の唇が私の唇に重なっている。それがさらに私の胸を締め付ける。

私はあなたをどう思つてているのだろう。好きなのか、愛しているのか、両方とも同じ言葉のようだが微妙に違つて聞こえる。好きとは相手がいなくてもいいが、いてくれると嬉しい程度の愛情表現であり、愛しているとは相手がいないと悲しくなる、苦しくなる、そんな違いだと私は考えている。そうだとすると私は彼を愛しているのだろう。

しかし彼は私の目の前に存在していて、口づけさえしてくれる。それなのに私は胸が締め付けられるような感じだ。嬉しいからなのだろうか。悲しいからなのだろうか。それとも怖いからか。もしかするとすべてかもしれない。

今は私の前に彼がいてくれることで嬉しい。だがしばらくして彼が私の側から離れてしまうのかと思うと怖い。そしてそれを考へると悲しい。そんな感じなのだろう。

そうだ。私は彼を愛している。しかし彼は私を愛しているのか。私の単なる思いこみで、彼が私を愛していると信じ込んでしまって

いるのか。そうだとしたら私の恐怖と悲しみはいざれ訪れる」ととなるだろ^う。

そう考えている間に彼は唇を離し、私に微笑んだ。別れるときはこんな感じになるんだ、ふとそう考へてしまつていた。

自分以外の生き物の考へていることはわからない。だからこそ喜怒哀樂が存在する。ほかの生き物の考へがわかつてしまつたら。生物はすべてを嬉と樂へ進めようとするだろう。だから我々を作つた神は他の生物の考へをわからぬように世界を作り上げたのだ。

それ故に不本意なこともしばしば起つてゐる。ただ、それを乗り越えられる力が私には必要なのだ。だから私は、いつまでも彼を愛し続けよう、そして私が彼に愛されていないのだとしても、これから彼に私のことを愛させて見せよう。それが私の考の道だ。

(後書き)

このような駄文を読んでくださった方に感謝します。これからもつ
といい作品を書けるように努力したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6907c/>

考の道

2011年1月16日03時33分発行